

## 【報告】



# バスケットボールリーグ戦（東海大学ホームゲーム）におけるサポート活動 —Tokai Emergency Transportation Teamの活動—

花岡美智子（体育学部競技スポーツ学科）

Support activities at basketball league games (Tokai University home games)

-Activities of Tokai Emergency Transportation Team

Michiko HANAOKA



## Abstract

This is a report on the emergency support activities conducted by the Medical Department of the Tokai University Sports Support Study Group during the Kanto University Basketball League home games held at Tokai University.

This activity was positioned as a support for the activities of the Kanto University Basketball Federation: Medical Department. Since the students were the main participants in the activities, the content of the activities was limited to primary life-saving treatment and emergency transport, and it was ensured that the activities would be carried out only under the direction of a doctor.

The main preparations were the creation of an emergency flow and the acquisition of appropriate and rapid transport techniques with head and neck protection.

Multiple web conferences were held with the organizers and doctors, and on the day of the event, meetings were held in person to share information and confirm materials and techniques.

The booths were located courtside, and we were able to check the match status from a location with good visibility during the matches.

During the support activities for a total of four matches over the two days, no incidents occurred.

Through this activity, we were able to acquire various knowledge and skills, such as transport techniques, preparedness for emergency response, simulation methods, and ideas for creating a flow, which will be very useful for future trainer activities.

We were also able to recognize that while careful preparation is necessary, a flexible response is effective in the field.

(Tokai J. Sports Med. Sci. No. 35, 25-32, 2023)

## I. はじめに

東海大学公認一般サークルであるスポーツサポート研究会メディカル部門（以降メディカル部門）は、スポーツ実施者に対して怪我の予防、救

急処置を含むコンディショニング全般を担う役割を持つアスレティックトレーナー（以降AT）に興味がある学生が集い、ATが実施する技術やそれに基づく理論について学習をしている団体である。在籍する学生は学内外のチームに学生スタッフとして参加している者、選手として活動しながら

ら知識を学ぶ者、将来に向けて知識や技術を学びながらも学生スタッフとして活動をしていない者など様々な活動形態を持つ学生が存在している。

新型コロナウイルス（以降 COVID-19）が流行した2020年以降、メディカル部門としてのサポート活動は著しく制限され、特に対面でのサポート活動については、イベントそのものの中止や、遠隔（リモート開催）への開催方式の変更などにより、全ての活動において実施することができなかつた。

そのような中、関東大学バスケットボールリーグのホームゲームが制限なしの通常開催で2019年以來3年ぶりに東海大学総合体育館において実施されることとなった。その試合にコロナ以前を含め初めてサポート活動をする機会を得ることが出来たため、本論文ではその活動内容について報告を行うこととする。

## II. 活動の位置づけ

本活動は一般社団法人関東大学バスケットボール連盟（以降、関東学連）医科学部が実施している関東学連主催試合中に発生した有事に対する活動のサポート、という位置付けで行った。医科学部は関東学連に所属する選手の外傷、障害、疾病、競技力向上を目的として2004年に強化部トレーナー委員会として発足し、2017年度に医科学部に昇格した組織である<sup>1)</sup>。連盟所属大学においてトレーナー活動、現場でトレーナー同等の活動をしているスタッフ、学生、学生スタッフ、チーム関係者に対し安全講習会や、テーピング動画の配信等の活動を行なっている。また主催の試合中、選手がプレーを中断するような案件が生じた場合、会場責任者への報告や選手への初期対応、復帰に向けてのフローなどを直接実施、あるいは資料として提示し、安全な試合運営、及び選手の競技復帰をサポートしている。

今回、メディカル部門の学生がサポート活動に参加するにあたり、医療資格やアスレティックト

表1 本活動の位置づけ及び活動内容

Table 1 Positioning of this activity and details of the activity

<p><b>【活動内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一般人でも実施することが可能な一次救命処置</li> <li>・CPR、AED対応、頭頸部保護を伴う搬送及び通常搬送</li> <li>・有事におけるフローの作成</li> </ul> <p><b>【指示系統】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・医科学部のドクターの指示の下で活動</li> </ul> <p><b>【その他】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象は試合中の選手とし観客は対象外とする</li> <li>・怪我に対する判断は実施しない</li> </ul>
--

レーナー等の資格を有していないこと、専門的な知識や技術に関して未熟であることが懸念点として挙げられた。そのため、実施内容について共通理解を図り明確化した。具体的な内容に関して表1に示す。

## III. 準備内容

本活動は、関東学連医科学部のサポートであることから、特に医科学部のドクターと内容を確認しながら準備を進めていった。主に有事に際してのフローの作成、頭頸部保護を伴う適切かつ迅速な搬送技術の習得に時間をかけて準備を行った。

また会場である東海大学総合体育館でホームゲームの企画運営を行う本学スポーツプロモーションセンター（以降 SPC）教員伊藤栄治先生、主にスタッフとして活動するスポーツレジャー・マネジメント学科の学生と、準備資機材や配置に関して連絡を取り準備を進めていった。

### 1. 関東学連との打ち合わせ

関東学連の理事会メンバー、医科学部部長、副部長、著者（メディカル部門担当教員、AT）、メディカル部門学生スタッフが参加し、計5回のweb会議を実施した。

#### 1) 第1回 web 会議：顔合わせ、活動概要の確認

初回の顔合わせを行い、本サポート活動におけ

る狙い、本学におけるメディカル部門及び学生サポートスタッフのこれまでの活動概要の説明、ホームゲームにおける活動内容及び課題の整理、今後の進め方について打ち合わせを行った。また本活動にあたって、Tokai Emergency Transportation Team、通称TETと銘打ち、チームとして活動する方針が示された。

## 2) 第2回 web 会議：活動の位置付け、フロー、救急搬送技術の確認

1回目の会議の約1ヶ月後に実施した会議では、競技運営サイドからの要望、医科学部からの指示を受け、ホームゲーム時の具体的な活動内容や指示系統について共通理解を図った。(内容については、本論文「II 活動の位置付け」を参照) また、事前に学生が作成した有事におけるフロー、頸椎保護を伴う搬送動画を送付し、ドクターよりコメントをいただき改善点が提示された。

## 3) 第3回 web 会議：フロー、救急搬送技術、準備内容の確認

夏季休暇を挟んで第3回以降の会議は、医科学部部長、副部長のドクターと打ち合わせを行い、フローや救急搬送の方法に関してアドバイスをいただき、内容を精査していった。ここで、実際に使用する備品（バックボード）の決定、具体的な手順、より安全性の高い手技の選択などを指導され、救急搬送に要する時間の短縮を求められた。

## 4) 第4回 web 会議：フロー、救急搬送技術の確認

第3回から約10日後の会議では、救急搬送時の役割を明確にし、時間短縮のための具体的な方法、

伏臥位からの体位変換等について指導を受け、実習を重ねた。またフローに関しては、今回の活動だけでなく今後学生が参加するクラブ等においても汎用できるよう、安全確認の重要性、救急隊へ伝える情報の詳細、確認の手順等について詳細なアドバイスを受けた。

## 5) 第5回 web 会議：フロー、救急搬送技術の確認

ホームゲーム開催直前に実施した会議では、フローと救急搬送方法の確認、当日の日程の確認がなされた。特に技術的に不安を感じる箇所に関しては、念入りに確認を行った。

## 2. 会場運営担当との打ち合わせ

今回実施されるホームゲームは、本学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科の学生が中心となって企画・運営するイベントである。本活動を実施するにあたり、スタッフが常駐し、機材を配置するスペースの確保や準備する資機材等について、運営側に活動概要を伝え情報共有する必要があった。

そのため活動の位置づけ、意義、活動内容を示す企画書を作成し、企画運営の責任者に提出した。具体的な準備資機材、スペースの確保については、担当学生と連携し相互の情報共有に務めた。主な確認内容、活動を表2に示す。

## 3. 学生スタッフの事前準備

TETとして活動は、部門内のスタッフのみで実施するものではなく、企画運営されたホームゲーム内におけるサポート活動であるため、まずホームゲームの全体像、学連の組織図を提示し、活

表2 運営担当との確認内容  
Table 2 Details to be confirmed with the management

- ・企画書の提出
- ・参加学生スタッフ名簿の提出
- ・準備する資機材（衝立、スタッフピブス）の要望
- ・配置スペースに関する情報  
(スペースの広さ、コートや救急搬送に備えた配置)
- ・救急車要請時のフローの確認（コート外搬送後の動線）

動の位置づけ、活動内容について認識することを徹底した。

次に、求められる活動内容に従い、知識と技術の向上に努めるべく、資料（主にフロー）の作成・更新と救急搬送の技術練習に多くの時間を割いて準備を行った。

フローに関しては、関東学連が作成した「（一社）関東学連主催試合中に発生した有事・外傷の対応と報告フロー」を基に、ホームゲーム時における対応を検討し、ドクターのチェックを受けながら修正を重ね完成させていった。完成したフローはスタッフ間で共有し、救急車の誘導経路、外傷発生からの手順について全員が把握した上で活動するように準備した。

救急搬送に関しては、実技をリモートでドクターに確認してもらいながら、より安全性を確保する目的から、頭頸部保護の受け渡しとしてアンテリアホールドや、伏臥位からの体位変換も加えて練習を行った。その結果、実施する作業内容が増えたにも関わらず、複数人が効率よく作業を行えるようになったことで、約1ヶ月で概ね1分以上の時間短縮を達成することが出来た。また今回の活動の対象がバスケットボール選手と限定されて

いたことから、高身長で体格の良い選手に対して搬送を行う上で考えられる問題点を挙げ、ベルトの装着方法、ログロールの手の位置、搬送時の重量感などシミュレーションを重ね、可能な限りで想定外のケースを減らすよう工夫し大会当日に向けて準備した。

## IV. 開催中の活動

### 1. 対象試合

第98回関東大学バスケットボールリーグ戦2022年10月22日、23日に東海大学湘南キャンパスにて実施された4試合が対象である。

- 10月22日 日本大学 対 早稲田大学、  
大東文化大学 対 東海大学
- 10月23日 拓殖大学 対 白鷗大学、  
東海大学 対 国土館大学

### 2. 会場レイアウト

東海大学湘南キャンパス総合体育館バスケットボールコートサイドにTETブースを設置した。ブース設置にあたっては、コートへの進入時や救



写真1 TET (Tokai Emergency Transportation Team) ブース位置  
Fig. 1 TET (Tokai Emergency Transportation Team) Booth Location



写真2 競技中スタッフ待機  
Fig. 2 Staff standby during competition

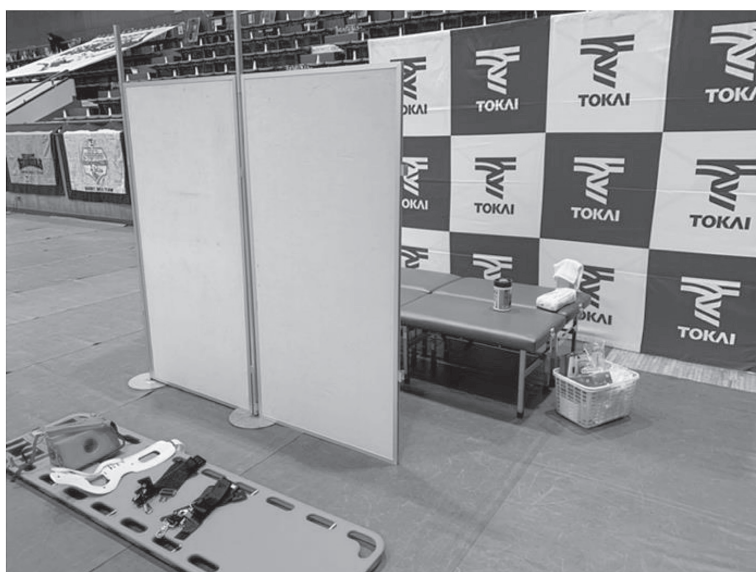


写真3 TET (Tokai Emergency Transportation Team) ブース備品  
Fig. 3 TET (Tokai Emergency Transportation Team) booth equipment

急隊到着時のストレッチャー搬入時に傷病者の動揺が最小限になるように、段差のないフラットな動線が得られる位置に設定した。(写真1)

### 3. 活動人数

関東学連医科学部に所属するドクター1名、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー資格を有する教員1名、東海大学スポーツサポート

研究会に所属する学生スタッフ5名(23日は6名)の計7名(23日は8名)で活動を行った。

競技中スタッフは試合状況を把握できるよう各自視認性の良いブース近くに待機した。(写真2)

### 4. 準備資機材

TETブースにはベッド2台、車椅子1台、バックボード一式(ボード、ヘッドイモビライザー、

ベルト)、ネックカラー1個、バッグバルブマスク一式、バスタオル2枚、感染症対策グッズ(速乾性手指消毒剤、手袋、ゴーグル、アルコール除菌ウェットティッシュ、タオル)をメディカル部門で準備し、また衝立を会場側に準備してもらい、当日設置を行なった。(写真2、3)

## 5. 当日準備

ホームゲーム前日には、大まかなブース位置は決定していたが、会場設営の関係からブースの設置が出来なかった。そのため当日ブースを設置し備品のセッティングを行なった。また医科学部ドクター、関東学連役員の方とは直接の顔合わせが初であったことから、顔合わせ、役割確認、当日

試合を行うチームスタッフ、トレーナーへのTETの概要説明を行った。

またドクターと事前打ち合わせを実施し、実際の試合会場での搬送距離や音響がある中でジェスチャーを用いた意思疎通の方法など、事前に確認が出来なかった部分について、試合開始前にシミュレーションを実施した。(写真4)

## 6. 対応事象

2日間計4試合のサポート活動においてTETが対応する事象は発生しなかった。

## V. まとめ

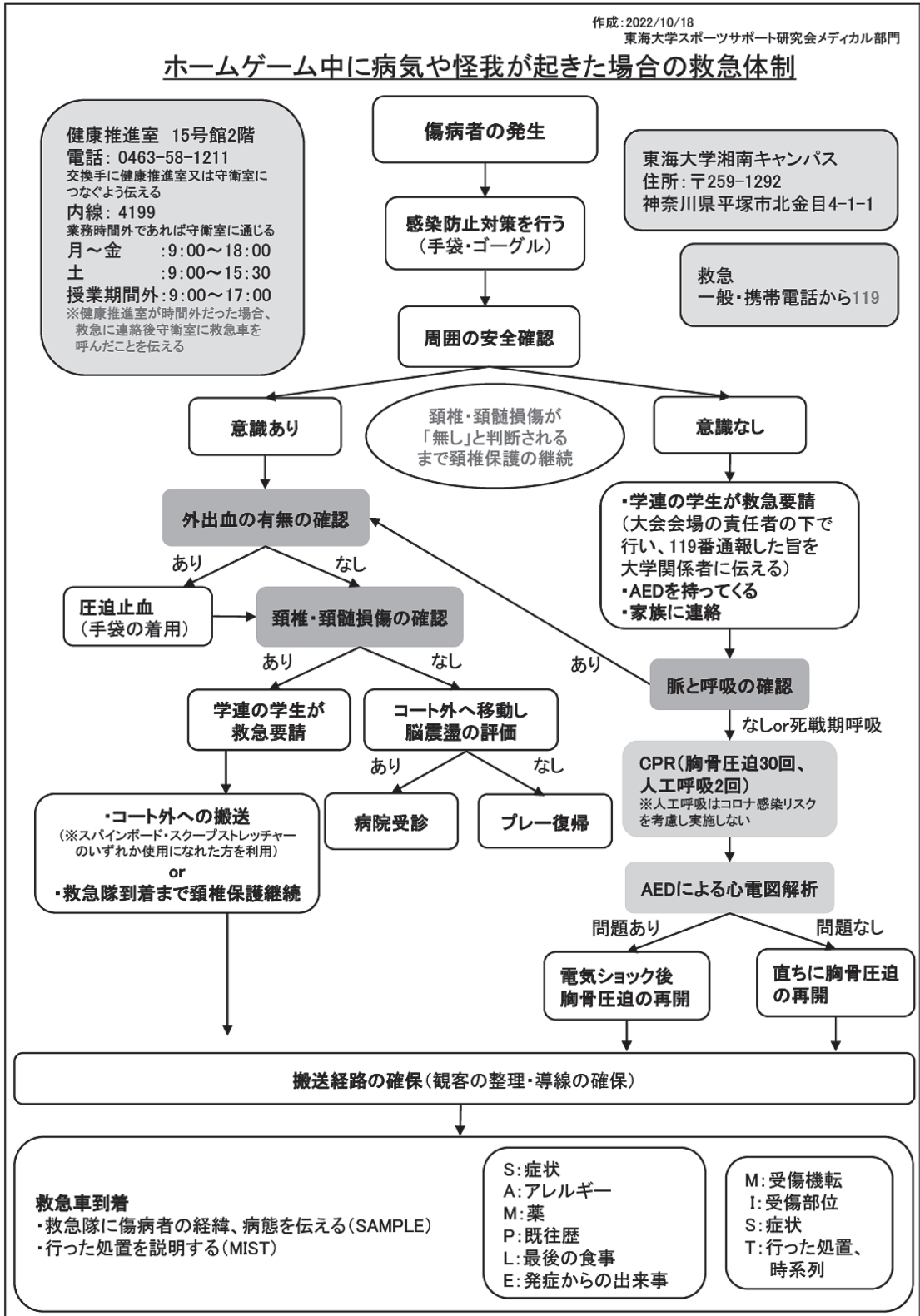
今回、サポート活動の参加を申し入れた時点では、このような活動は関東学連においても前例がなく、学生主体の活動となることから、「何をどこまで行うのか」「指示系統を明確にしてほしい」という意見が連盟や企画運営側より提示された。外傷発生時のサポート活動ということで、医療資格を有さない学生の活動をどこまで許可し、制限をかけるのが争点であったが、「学生スポーツの安心安全確保のためにも良い取り組みである」、「医療搬送スタッフを全会場に配置することは出来ず、会場となる大学の学生トレーナーが参加することが出来れば、会場運営、学生トレーナーの育成双方にとっても良いことである」、「今回の例を今後のケースモデルにしていけると良い」と前向きな意見をいただき、活動に対する理解が得られたことで、活動が実現し、学生ATのモチベーションも高まり、一層責任感が芽生えたと実感している。

前例のない活動であったことから、まず核となるマニュアルを作成することから準備を進める必要があったが、試合で起こりうる事象を想定しながら、フローの作成や救急搬送の準備を行うことでスムーズな活動が可能になったと感じている。(完成したフローを資料1に示す。)また組織における位置づけを明確にし、やるべきことを限定し



写真4 救急搬送のシミュレーション  
Fig. 4 Simulation of emergency transportation

資料1 ホームゲームの有事に対する救急フロー  
Document 1 Emergency Flow for Home Game Contingencies



たことで、役割を自覚し必要とされる技術や知識の向上に専念できたことも TET として機能した要因と思われる。さらに医科学部のドクターが救急医、整形外科医であったことから、直接救急時の対応について細やかな技術指導、救急対応時の心構え、機材の使用法、事前練習（シミュレーション）の方法、今後の活動に活かせるフロー作成時の工夫など様々な情報を享受していただき、今回の活動に限らず今後のトレーナー活動に非常に役立つ経験を得ることができた。特にドクターから「そんな事ない、と思うことが起こるのが現場」であり、固めすぎたシミュレーションではなく、誰がどの立場にあってもスムーズに連携が取れて対応できるような体制を構築していくのが良い、という話があり、事前準備は入念でありながらも柔軟性を持った対応が現場では有効であることを認識することができた。

本活動を通して、多くの方の支援、協力があって初めてトレーナー活動が実現できること、場面を想定した反復練習、最高の準備を行うことで自信を持って本番を迎えられることを改めて感じることができ、各自の成長に大きな影響を与えたと確信している。この経験を今後のメディカル部門、また各自の活動に活かしていきたい。

## 謝辞

今回、活動の機会を与えていただいた関東大学バスケットボール連盟理事長吉見敬一氏、競技部長廣田和生氏、東海大学男子バスケットボール部陸川章監督はじめ関係者各位、活動に際して知識や技術など細やかにご指導いただきました医科学部長小松孝行先生、伊藤恵梨先生、運営にあたりご尽力いただきました東海大学スポーツ・レジャーマネジメント学科伊藤栄治先生、他関係者各位に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 一般社団法人関東大学バスケットボール連盟ホームページ <https://www.kcbbf.jp/>